

脊椎動物篇

総論

はじめに

1992年度から94年度にかけて「神奈川県レッドデータ調査」の一環として、県内に生息する脊椎動物(淡水魚類・両生類・爬虫類・鳥類・哺乳類)の生息状況と分布に関する既存の文献資料および聞き取り等により情報の収集を行い、この間に両生類の一部(トウキョウサンショウウオとモリアオガエル)の生息状況について現地調査を実施した。

その結果、魚類については、34科121種(うち帰化種・逸出種12科38種)、両生類については、9科20種(うち帰化種・逸出種4科4種)、爬虫類については、11科24種(うち帰化種・逸出種3科4種)、鳥類については、63科394種(うち帰化種・逸出種17科56種)、哺乳類については29科72種(うち帰化種・逸出種9科14種)が記録された。

これらのうち、偶来種・迷入種や帰化種・逸出種を除くすべての種について「過去」の生息状況と現在の生息状況を比較検討してレッドデータ度の評価を試みた。「過去」の基点をどの時代に置かかによって評価は異なるであろうが、ここでは以下に述べる理由にもとづいて明治末期から高度成長期に入る昭和30年(1955)代までを「過去」とした。

日本の自然は原始的自然、農村的自然、都市的自然の三つの段階的变化として捉えられている(日浦, 1973)。日本は森林国であり、国土の7割ぐらいが森林に覆われていると言われるが、その森林の中身が問題であり、その質を問えば、原始的な自然と言える場所はせいぜい1割とか1割5分程度しか残されていない。つまり、今日の日本の自然は決して「原始的な自然」ではなく、かなりの程度で「農村的な自然」であり、さらに現在では「都市的な自然」が進展しているということである。

「農村的な自然」を言い換えるならば「里山的な自然」ということになるが、「里山」という言葉が使われるようになったこと自体新しいものであり、一般的なものではなかった。おそらくそれはヤマとサトが、地理的な空間の区分を指したものでなかったことによるものと思われる。民俗学者によれば、山地で生活する人びとの間には、平地で稲作農耕に従事する人びとは異なった空間認識が形成されていた。そうした山地の空間認識の一つとしてヤマとサトがある。それはあくまでも狩猟者とりわけマタギの間に形成された民俗的な空間の区分である。人の力の及ぶ空間がサトであり、人びとはそこを生

活の拠点とした。しかし、一步でもサトを離れると、そこは人の力の及ばない自然の支配する空間である。人びとはそうした空間をヤマと呼んだのである(伊藤, 1989)。ヤマという言葉は、実態としては必ずしも高い土地を指してはいない。濃尾平野や関東平野では河岸や平地の樹林地をもヤマと呼びならわした(千葉, 1980)。

民俗学に生態学を加味して「里山」を定義するならば、「持続する人の日常生活が営まれ、それによる長年にわたる攪乱と植生遷移とが動的平衡にある丘陵地や山地とそれを取り巻く環境」ということになろう。したがって系としては不安定であり、里山的な環境が維持されるには絶え間ない人の干渉を必要とする。

里山は、かつては私たちの生活に欠かすことのできなかった木炭の生産を始めとして、また今なお欠かすことのできない穀類等の生産の場として利用されてきた。しかしながら、戦後復興期からいわゆる高度成長期を境に、里山の持つ機能と伝統的な意義は喪失し始めた。1955年頃から起こった燃料革命により、炭や薪などの木質燃料から石油、ガスなどの化石燃料への急速な転換がはかられ、そのため里山の存続する経済的基盤と意義は失われていった。薪炭林として利用されなくなった林は植生の遷移が進み、谷戸田は休耕され、場所によっては乾燥化が進んだ。犬井(1992)によれば、1960年から1980年の間だけでも神奈川県内の平地林の減少率は31.8%にも達した。一方、山林の減少率は4.8%と低いのが、この数値には植林が関係している。山地では、燃料革命と同じ頃からスギやヒノキを主体とした針葉樹林の造林は増加の一途をたどり、逆に天然の広葉樹林は減少していった。

いわゆる高度成長期は、里山の経済上の問題ばかりでなく、生態系の変革をもたらし、人びとの生活ばかりでなく、そこに生活の根拠を持っていた動植物相に大きな影響を与えた。また拡大造林は山地の動植物相にも大きな影響をおよぼした。この点を重視して明治末期ぐらいから昭和30年(1955)代の高度成長期に入るまでを「過去」、それ以後を「現在」として扱った。

高度成長期以前の「里山」に加えられていた人為的な攪乱が緩やかで小規模なものであったのに比較して、日本の土木技術は、もっぱら狭い工作物のみを対象として、その背景にある自然景観や住民意識との調和に無関心であったばかりでなく、高度成長期以後の攪乱は土木技術を背景にして急激で大規模なものに変わった。そのこと

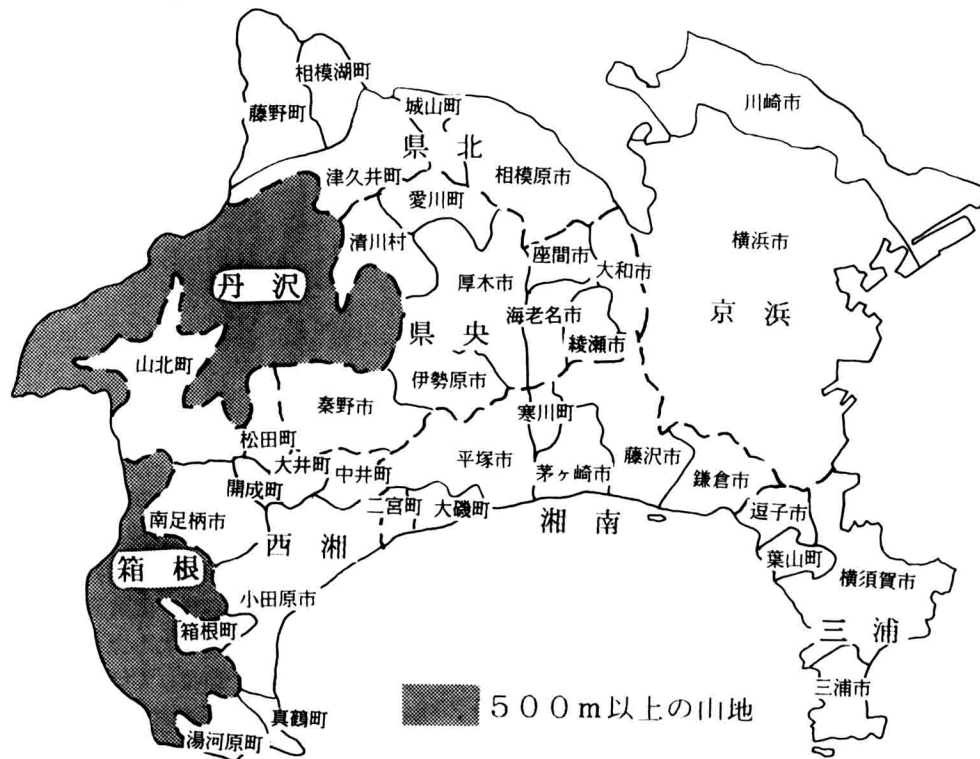


図1.ブロック区分図.

は、そこに生息する動植物(一部の種を除いて)に適応するいとまを与えずにその生息環境を大きく変化させることにつながった。各論で指摘されたように、多くの水生の脊椎動物が危惧種や絶滅種に位置づけられた理由の一つは、そうした点にある。

本報告における調査および執筆分担は次の通りである。

- 魚類・両生類・爬虫類(浜口哲一：平塚市博物館)
 - 鳥類(平田寛重：日本野鳥の会神奈川支部)
 - 霊長類を除く哺乳類(中村一恵：神奈川県立生命の星・地球博物館)
 - 霊長類(広谷浩子：神奈川県立生命の星・地球博物館)
- 総論については四者の協議のもとに構成し、中村が執筆した。

資料の分析と方法

県内で記録された脊椎動物のレッドデータ度のまとめを表1~6に示した。鳥類については繁殖期と非繁殖期の二つに分けて評価した。県内における脊椎動物の分布一覧を付記したレッドデータ度の詳細表は、各論の分類(綱単位)ごとに表7~11として示した。

表中の凡例は下記の通りである。

・「ステータス(STATUS)」の項目では、下記の基準で記入を行った。

W：普通；R：少ない；L：局地的；E：絶滅；T：偶発的・一時的。

・「帰化種(逸出種を含む)の項目」には該当する種に「※」をつけた。

・「帰化種原産地」は下記のような記号で主たる産地名として示し、日本産の国内帰化種と飼育飼養品種起源の

ものについては下記のような別記号で示した。

As：アジア；Af：アフリカ；NA：北米；SA：南米；Eu：ヨーロッパ；In：国内帰化；D：飼育飼養品種起源。

・「鳥類の渡り区分」は下記のように示した。

R：留鳥；S：夏鳥；W：冬鳥；T：旅鳥；A：迷鳥
分布記録については県内を8ブロックに分けて整理した(図1)。ブロックの地域割は下記の通りである。なお、分布記録の一部には中村、浜口、平田の未発表資料を用いてある。

京浜：横浜・川崎

三浦：横須賀・三浦・葉山・逗子

湘南：鎌倉・藤沢・茅ヶ崎・寒川・平塚・大磯・二宮
県央：大和・座間・綾瀬・海老名・厚木・愛川・伊勢原・秦野・清川

県北：相模原・城山・相模湖・藤野・津久井

西湘：小田原・中井・大井・開成・松田・山北・南足柄・箱根・湯河原・真鶴

丹沢：津久井・清川・厚木・伊勢原・秦野・松田・山北の標高500m以上の山地。

箱根：山北・南足柄・小田原・箱根・真鶴・湯河原の標高500m以上の山地。

ここでステータスと呼んだ生息状況には二つの側面がある。一つは、県内で広域的に分布するか、あるいは限られた地域に分布するかという、主に平面的な分布に関することである。分布が限られている原因には、もともとの生物地理的な要因による場合と、生息環境の変化など主に人為的な要因による場合がある。もう一つの側面

は、個体数の多寡、具体的には記録頻度の多さという面である。

理論的には、分布の広さと個体数の多さを組み合わせると、下記の四通りの場合がでてくる。

- 1.広域に分布し多い。
- 2.広域に分布するが少ない。
- 3.局地的に分布するが個体数は多い。
- 4.局地的に分布し少ない。

しかし実際には、3のケースはほとんどないと思われるので、今回のリストでは、1・2・4の三つをそれぞれ、W・R・Lの記号で表現した。また、本県から絶滅したと判断された種をEとし、一時的な渡来や逸出を示すTを加えてステータスとした。なお、Tの位置づけになった種は、県内での記録は少ないとはいっても、生息の本拠地は別の地域にある場合がほとんどであり、本県の実環境保全を考えるうえでの意義は相対的に小さい。けれども、干潟に渡来するシギ・チドリ類などの鳥類やイルカ類などの鯨類のように、特殊な、あるいはその種に相応する環境があることが偶発的な渡来を誘起する意味を持っている場合もあるので注意を要する。

次にレッドデータ度を評価するために、前記定義による過去と現在の生息状況の変化にもとづき、評価の対象となったそれぞれの種について、絶滅種、危惧種、減少種、健在種の四つのカテゴリーに分類し、さらに健全種の中から希少種を抽出した。絶滅種、危惧種、減少種、希少種、健在種に、それぞれ、●、○、△、▲、■のマークを用い、各論の中で和名の前に付記してランクがわかるようにした。

なお、分類するにあたっては昆虫部会で考案された模式図を参考とし、評価種の具体例を表示した(図2)。以下にそのランクと定義を示す。

なお、繁殖力や寿命などの生活史、なわばりの広さ等のハビタットへの要求度は種ごとに異なる。それを同一の尺度で評価すること自体問題がある。また、ほとんどの種について言えることだが、「過去」の生息状況に関する情報は十分なものではなく、かつ現在に至っても生息に関する情報がきわめて乏しい種もあり、評価にとまどう場面にしばしば遭遇した。が、それを承知のうえで評価したのは、それほど現代における野生動物の置かれた状況は危機的であることによる。種によっては、今後の調査の継続とその結果を踏まえての、それぞれの専門家による再評価が必要である。また、分布一覧の※マークは、主として昭和30年(1955)以降の資料を基に打ってあるが、「※」の記載があっても種によっては該当ブロックではすでに見られなくなっているものがある。本文に入る前にとくにこの点を断っておきたい。

ランクの定義と評価の結果

I. 絶滅種。A～Cまでの3ランクに分けた。

近年、野生の状態での信頼できる生息状況が得られず、絶滅と判断された種(A～C)。そのうちAランクはもともと分布は狭く局地的に生息し、それが絶滅したと判断されたもので、魚類ではミヤコタナゴ、鳥類ではカラスバトが挙げられた。Bランクは、分布はやはり局地的

的でAランクよりは個体数は多かった種と思われるが、それが絶滅と判断されたもの。タナゴ、ヤリタナゴ、トビハゼ、オオカミ、カワウソ、アシカが挙げられた。Cランクは、分布が広く個体数も多い種が伝染病の蔓延や極端な狩猟圧といった理由でカタストロフィックに絶滅する場合であるが、実際には起こりにくいもので、少なくとも今回評価の対象とした県産脊椎動物には該当する種はなかった。

II. 危惧種。D～Fまでの3ランクに分けた。

現在の生息条件または生息環境が悪化しており、これらの状況が継続して作用するならば、近い将来に絶滅種のランクに移行する恐れのある種。そのうちDランクは、現在も分布が限られ、かつ個体数が少ない種。Eランクは、分布は比較的広いが個体数が少なくなっている種。Fランクはかつて広域分布であったが分布が限定されるようになり、かつ個体数が少なくなっている種。

III. 減少種。G～Hまでの2ランクに分けた。

Gランクは、分布は広分布種であるが、分布が狭まり、個体数も減少している種。Hランクは、広域に分布しているが、個体数が減少している種。

IV. 健在種。IからLまでの5ランクに分けた。

5ランクのうち、Iランクは、狭分布を維持している種であり、I*ランクは、分布が希薄で、かつ個体数の少ないと考えられた種であり、それを「希少種」に位置づけた。現在のところ危惧種に該当しないが、生息条件または生息環境の急変によっては容易に上位のランクに移行するような脆弱性を有すると考えられた種である。Jは比較的広い分布を維持している種。Kランクは、広分布で比較的個体数の多い種。Lランクは、広分布で個体数の多い種である。

県産脊椎動物の絶滅種は魚類4種、鳥類1種、哺乳類3種の計8種となった。両生類と爬虫類に絶滅種はなかった。絶滅種のうち、カラスバト、オオカミ、アシカは明治中・後期までに絶滅したものと考えられ、タナゴ類3種とカワウソは昭和に入ってから絶滅である。各論で明記されたようにトビハゼについての記録はほとんど残されていないが、生息地の現況等から推定して絶滅種と判断した。

危惧種は魚類20種、両生類3種、爬虫類2種、鳥類33種、哺乳類4種の計62種となった。F-E-Dの順に分布が限定され、レッドデータ度は高いと言えるが、危惧種のうち、とくにFランクに挙げられた種はかつては普通種であったが、急激な減少の傾向にあると認められるものであり、危機的な種である。健在種ではあっても、L-K-J-Iの順にレッドデータ度は高まり、とくにIやI*ランクは生息環境等の破壊により一挙に危惧種Dランクに移行する恐れのある種である。

提言

脊椎動物のレッドデータ度評価を通覧すると、平地から丘陵地の暖温帯域に生息する種で、とくに絶滅種や危惧種が目立っている。言い換えれば、里山の動物が危機に瀕している。自然性の最も高い林奥(本県で言えば、照葉樹林の極相にある自然林)に限って存在する種もいる

	過去の分布	現在の分布	分類例
I 絶滅種 (A~C)			
A			ミヤコタナゴ・カラスバト
B			タナゴ・ヤリタナゴ・トビハゼ・オオカミ・カウウソ・アシカ
C			
II 危惧種 (D~F)			
D			ゼニタナゴ・トウキョウサンショウウオ・クロサギ・ブッポウソウ・ツキノワグマなど
E			ギバチ・アカウミガメ・ミゾゴイ・ヒクイナ・スナメリなど
F			タマシギ・コアジサシ・ホトケドジョウ・メダカ・イモリなど
III 減少種 (G~H)			
G			ヤマメ・サシバ・イカルチドリ・カモシカなど
H			カマツカ・ニホンアカガエル・シマヘビ・フクロウ・サンコウチョウ・カヤネズミなど

	過去の分布	現在の分布	分類例
IV 健在種 (I~K)			
			カマツカ・モリアオガエル・クマタカ・オシドリ・モリアブラコウモリなど
I			オオヨシノボリ・ヒダサンショウウオ・ルリビタキ・メボソムシクイ・ニホンザルなど
J			カジカガエル・ジムグリ・アオバト・アカゲラ・イノシシなど
K			ヤマアカガエル・カナヘビ・キジ・ヤマガラ・タヌキなど
L			モツゴ・アマガエル・ツバメ・シジュウカラなど

図2. 生息状況の変化によるレッドデータ度の分類.

が、多くの生物群では林縁を中心とした部分で豊かになっており、生物群が自然性の最も高い林奥で最大の多様性と豊かさを示すわけではない。これは生態学という周辺効果(または林縁効果)によるものである。里山には「原始的な自然」はほとんどなく、「二次的な自然」から成り立つ「自然」である。里山は、森林ばかりでなくその中を流れる沢や湿地や谷戸田を含む概念であり、水田・畑・林などの要素がモザイク状に複雑に入り組んでいること、水辺環境に恵まれていることなどが大きな特徴である。長年にわたる農耕を中心とした人の自然への適度な干渉の結果として生まれた、ある種の調和のとれた系である。

里山的環境が周辺効果を持つに至った系であることは、同時にそれが人の干渉の程度によっては植生の遷移が思いのほか速く進む「自然」と同義であると知っておく必要がある。こうした特性を持つ里山的自然を維持するためには、自治体は将来的な財産として思いきった投資による近郊緑地としての買取りを進め、そのうえで適度な自然への干渉のプログラミングの策定が必要である。そして県民サイドでも積極的にその支援をせねばならない。さらには開発にあたっての緑地の残し方についても詳しく調査する必要がある、とくに水辺環境の維持を配慮せねばならない。里山的環境を必要とする種は、疎林、草原、湿地的な環境を生活場所としていた種である。各論で指摘されたように、つい近年まで身近な存在であった小動物が減少、あるいは絶滅に瀕してしている。このことに強い危機感を持たねばならない。

こうした里山的環境を生活の拠点とする在来種に追い打ちをかけているのが、国外国内を問わない外来種(ここでは帰化逸出種として一括した)の移入移植と、その結果として起きた、あるいは起こるであろう外来種の定着である。外来種による攪乱は淡水魚類で著しいものがある。外来種を野生化させることは経済的もしくは遺伝的資源としての本来的な価値を持つ反面、一方で、野生化個体群そのものに価値が認められている場所であっても、外来種による捕食、競合、交雑、新たな病原菌の伝播など、在来種の生態的・遺伝的バランスの変化に関与する事態が生じる恐れは大きい。在来種とそれによって構成される在来動物相の保護と保全を常に優先すべきである。

丹沢のような山地帯については、生息地の攪乱・破壊による生息分布域の消滅、または分断・縮小という追込みは、とくにツキノワグマ、ニホンジカ、カモシカといった大型種の近未来の絶滅を招き、各論で述べたような丹沢で起きているシカ問題は、ひとりシカに限定されるものでなく、こうした大型獣が安住し得る森林の本来あるべき姿が問われていることの象徴であることを指摘した。とくにシカのような農林業との軋轢が大きな社会問題になっている野生動物については、その生態をふまえたうえで、農林業にたざさわる人びとの暮らしや生産様式とどう両立させてゆくのかの、さらなる論議が必要

である。

そのためには個体群動態の情報を得るための当該施設の機能充実と研究技術の確立が急務であり、県立生命の星・地球博物館がその一端を担わなければならない。また、自然科学の分野だけでなく、日本人と野生動物との関係は、実際にはどのようなものであったのか、日本人の動物観や自然観を歴史から学び取る姿勢と意識が不可欠である。

ニホンオオカミの絶滅がおそらくはそうであったように、種の絶滅は、異なる地域に生息する個体群が独自に絶滅し、種の絶滅はそれらの累積として起こるものと思われる。したがって、種といった分類の単位で保全を考えるのではなく、地域個体群の保全の問題を中心に考えるべきである。野生動物がわれわれ人間の生活にとってかけがえのないものとしてその保護の必要性をさらに強く認識し、郷土の動植物の地域個体群の保護と保全は自治体とその住民の責務であることを忘れてはならない。

謝辞

本調査をまとめるにあたり、先人による多くの調査・研究の成果や貴重な記録を参考にさせていただいた。また調査の実施にあたっては、林公義・池田等・斎藤和久・瀬能宏(以上、魚類関係)、新井一政・石井達夫・大野正人・内田至(以上、両生爬虫類関係)、竹内裕・田代道彌(以上、鳥類関係)、飯村武・石原龍雄・木下あけみ・野口光昭・小原巖・岡野美佐夫・柴田敏隆・山口佳秀(以上、哺乳類関係)の方々の多大なご協力をいただいた。以上の方々に衷心より御礼申し上げる(分野別でアルファベット順、敬称略)。また、秋山信彦・端山昇・石原龍雄・中村道也の方々から貴重な写真の提供をいただいた。合わせて厚く御礼申し上げる(アルファベット順、敬称略)。

参考文献

- 千葉徳爾, 1980. 日本人の自然観. 土木工学体系4, 自然環境論(III), pp. 35-82. 彰国社.
- 浜口哲一, 1992. 日本の野生動物, その現状をさぐる(里山の鳥). アニマ, 20(11): 46-47.
- 日浦勇, 1973. 海をわたる蝶. 蒼樹書房. 200 pp.
- 犬井正, 1992. 関東平野の平地林. 古今書院. 162 pp.
- 伊藤廣之, 1989. 山の世界. 鳥越皓之編『民俗学に学ぶ』, pp. 106-125. 世界思想社.
- IUCN種保存委員会/環境委員会/環境政策・法および行政委員会, 1987(大橋一成ほか訳, 1994). 生物種の移出入. 海外動物園水族館情報, No.2, 通巻7号, 19-30. 東京動物園協会.
- 神奈川県環境生物研究会, 1984. 予測評価手法の体系化に関する調査研究(生態系). 223 pp.
- 関東弁護士会連合会, 1994. 里山の復権を求めて—身近な自然の保全・再生—. 539 pp.
- 河田雅圭・千葉聡, 1994. 絶滅パターンの原因と進化. 科学, 64: 684-690.

(中村一恵)

表1. 淡水魚類レッドデータ度

和名	ステータス	レッドデータ度
ミヤコタナゴ	E	絶滅種 A
タナゴ	E	絶滅種 B
ヤリタナゴ	E	絶滅種 B
トビハゼ	E	絶滅種 B
ゼニタナゴ	L	危惧種 D
マルタ	L	危惧種 D
イワナ	L	危惧種 D
マゴチ	L	危惧種 D
キチヌ	L	危惧種 D
シロウオ	L	危惧種 D
スナヤツメ	L	危惧種 E
ギバチ	L	危惧種 E
カマキリ (アユカケ)	L	危惧種 E
ギンガメアジ	R	危惧種 E
メナダ	L	危惧種 E
ビリンゴ	R	危惧種 E
ニクハゼ	L	危惧種 E
ウキゴリ	R	危惧種 E
カワアナゴ	L	危惧種 E
ボウズハゼ	R	危惧種 E
イシガレイ	L	危惧種 E
ニゴイ	L	危惧種 F
ホトケドジョウ	L	危惧種 F
メダカ	L	危惧種 F
ヤマメ	R	減少種 G
ヒイラギ	R	減少種 G
クロダイ	R	減少種 G
アシシロハゼ	R	減少種 G
スミウキゴリ	R	減少種 G
ヒメハゼ	R	減少種 G
ゴクラクハゼ	L	減少種 G
ウナギ	W	減少種 H
コイ	W	減少種 H
カマツカ	R	減少種 H
ウグイ	W	減少種 H
シマドジョウ	R	減少種 H
ナマズ	W	減少種 H
アユ	W	減少種 H
カジカ	R	減少種 H
スズキ	R	減少種 H
シマイサキ	L	減少種 H
ミミズハゼ	L	減少種 H
ヌマチチブ	R	減少種 H
イシカワシラウオ	L	希少種 I*
サケ	L	希少種 I*
サヨリ	L	希少種 I*
ヨウジウオ	L	希少種 I*
ユゴイ	L	希少種 I*
クモハゼ	R	希少種 I*
ジュズカケハゼ	L	希少種 I*
エドハゼ	L	希少種 I*
ヒモハゼ	L	希少種 I*
ウロハゼ	L	希少種 I*
サツキハゼ	L	希少種 I*
マサゴハゼ	L	希少種 I*

和名	ステータス	レッドデータ度
アカオビシマハゼ	L	希少種 I*
コボラ	L	健在種 I
スジハゼ	L	健在種 I
オオヨシノボリ	R	健在種 I
キンブナ	L	健在種 J
セスジボラ	R	健在種 J
マハゼ	R	健在種 J
アベハゼ	R	健在種 J
クロヨシノボリ	R	健在種 J
トウヨシノボリ	R	健在種 J
ルリヨシノボリ	R	健在種 J
シモフリシマハゼ	R	健在種 J
クサフグ	R	健在種 J
アブラハヤ	W	健在種 K
コトヒキ	W	健在種 K
チチブ	W	健在種 K
ギンブナ	W	健在種 L
モツゴ	W	健在種 L
ドジョウ	W	健在種 L
ボラ	W	健在種 L
シマヨシノボリ	W	健在種 L

表2. 両生類レッドデータ度

和名	ステータス	レッドデータ度
トウキョウサンショウウオ	L	危惧種 D
トノサマガエル	L	危惧種 D
イモリ	L	危惧種 F
ハコネサンショウウオ	R	減少種 G
アズマヒキガエル	W	減少種 H
トウキョウダルマガエル	W	減少種 H
ニホンアカガエル	R	減少種 H
シュレーゲルアオガエル	W	減少種 H
ナガレタゴガエル	L	希少種 I*
モリアオガエル	L	希少種 I*
ヒダサンショウウオ	L	希少種 I*
タゴガエル	R	健在種 J
カジカガエル	R	健在種 J
ヤマアカガエル	W	健在種 K
ツチガエル	W	健在種 K
アマガエル	W	健在種 L

表3. 爬虫類レッドデータ度

和名	ステータス	レッドデータ度
イシガメ	L	危惧種 E
アカウミガメ	L	危惧種 E
トカゲ	W	減少種 H
アオダイショウ	W	減少種 H
シマヘビ	W	減少種 H
ヒバカリ	W	減少種 H
ヤマカガシ	W	減少種 H
マムシ	R	減少種 H
ヤモリ	R	健在種 J
シロマダラ	R	健在種 J
ジムグリ	W	健在種 J
カナヘビ	W	健在種 K
タカチホヘビ	R	健在種 K

表4. 鳥類 (繁殖期) レッドデータ度

和名	繁殖期 ステータス	繁殖期レッドデータ 度
カラスバト	E	絶滅種 A
クロサギ	L	危惧種 D
ブッポウソウ	L	危惧種 D
ヨシゴイ	L	危惧種 E
ミゾゴイ	L	危惧種 E
ヒクイナ	L	危惧種 E
シロチドリ	L	危惧種 E
コノハズク	L	危惧種 E
コサメビタキ	L	危惧種 E
タマシギ	L	危惧種 E
コアジサシ	L	危惧種 E
ゴイサギ	R	減少種 G
ササゴイ	L	減少種 G
アマサギ	L	減少種 G
ダイサギ	L	減少種 G
サシバ	L	減少種 G
ヤマドリ	R	減少種 G
コチドリ	R	減少種 G
イカルチドリ	L	減少種 G
イソシギ	R	減少種 G
ヨタカ	L	減少種 G
サンショウクイ	L	減少種 G
コサギ	R	減少種 H
トビ	R	減少種 H
バン	R	減少種 H
アオバズク	R	減少種 H
フクロウ	R	減少種 H
ヒバリ	R	減少種 H
コシアカツバメ	R	減少種 H
ヤブサメ	R	減少種 H
オオヨシキリ	R	減少種 H
セッカ	R	減少種 H
オオルリ	R	減少種 H
サンコウチョウ	R	減少種 H
ホオアカ	L	減少種 H
オオタカ	L	希少種 I *
ツミ	L	希少種 I *
ハイタカ	L	希少種 I *
クマタカ	L	希少種 I *
オシドリ	L	希少種 I *
アカショウビン	L	希少種 I *
オオアカゲラ	L	希少種 I *
キクイタダキ	L	希少種 I *
ノジコ	L	希少種 I *
アオジ	L	希少種 I *
ルリビタキ	L	健在種 I
メボソムシクイ	R	健在種 I
カイツブリ	R	健在種 J
チョウゲンボウ	L	健在種 J
アオバト	R	健在種 J
ジュウイチ	R	健在種 J
カッコウ	R	健在種 J
ツツドリ	R	健在種 J
ホトトギス	R	健在種 J
ヒメアマツバメ	R	健在種 J
ヤマセミ	R	健在種 J
アカゲラ	R	健在種 J
ビンズイ	R	健在種 J

和名	繁殖期 ステータス	繁殖期レッドデータ 度
カワガラス	R	健在種 J
ミソサザイ	R	健在種 J
コマドリ	R	健在種 J
コルリ	R	健在種 J
イソヒヨドリ	R	健在種 J
マミジロ	R	健在種 J
トラツグミ	R	健在種 J
クロツグミ	R	健在種 J
アカハラ	R	健在種 J
エゾムシクイ	R	健在種 J
キビタキ	R	健在種 J
コガラ	R	健在種 J
ヒガラ	R	健在種 J
ゴジュウカラ	R	健在種 J
イカル	R	健在種 J
カケス	R	健在種 J
カルガモ	W	健在種 K
キジ	R	健在種 K
カワセミ	R	健在種 K
アオゲラ	R	健在種 K
キセキレイ	R	健在種 K
ウグイス	W	健在種 K
センダイムシクイ	R	健在種 K
エナガ	R	健在種 K
ヤマガラ	R	健在種 K
キジバト	W	健在種 L
コゲラ	W	健在種 L
ツバメ	W	健在種 L
イワツバメ	W	健在種 L
ハクセキレイ	W	健在種 L
セグロセキレイ	R	健在種 L
ヒヨドリ	W	健在種 L
モズ	W	健在種 L
シジュウカラ	W	健在種 L
メジロ	W	健在種 L
ホオジロ	W	健在種 L
カワラヒワ	W	健在種 L
スズメ	W	健在種 L
ムクドリ	W	健在種 L
オナガ	R	健在種 L
ハシボソガラス	W	健在種 L
ハシブトガラス	W	健在種 L

表5. 鳥類 (非繁殖期) レッドデータ度

和名	非繁殖期ステータス	非繁殖期レッドデータ度	和名	非繁殖期ステータス	非繁殖期レッドデータ度
カラスバト	E	絶滅種 A	ワシカモメ	L	健在種 I
オオメダイチドリ	L	危惧種 D	シロカモメ	L	健在種 I
サルハマシギ	L	危惧種 D	ミツユビカモメ	L	健在種 I
コオバシギ	L	危惧種 D	オオコノハズク	L	健在種 I
アカアシシギ	L	危惧種 D	オオアカゲラ	L	健在種 I
コアオアシシギ	L	危惧種 D	キレンジャク	L	健在種 I
ダイシャクシギ	L	危惧種 D	ハギマシコ	L	健在種 I
ハウロクシギ	L	危惧種 D	オオマシコ	L	健在種 I
トラフズク	L	危惧種 D	コイカル	L	健在種 I
コミミズク	L	危惧種 D	ハジロカイツブリ	R	健在種 J
ニューナイスズメ	L	危惧種 D	カワウ	R	健在種 J
オバシギ	L	危惧種 E	ダイサギ	R	健在種 J
キリアイ	L	危惧種 E	チュウサギ	L	健在種 J
アカエリヒレアシシギ	R	危惧種 E	クロサギ	L	健在種 J
ダイゼン	L	危惧種 F	ミサゴ	L	健在種 J
ヒバリシギ	L	危惧種 F	ハチクマ	L	健在種 J
オジロトウネン	L	危惧種 F	オオタカ	L	健在種 J
アメリカウズラシギ	L	危惧種 F	ハイタカ	L	健在種 J
ウズラシギ	L	危惧種 F	ハヤブサ	R	健在種 J
エリマキシギ	L	危惧種 F	オシドリ	R	健在種 J
ツルシギ	L	危惧種 F	ヨシガモ	R	健在種 J
オグロシギ	R	危惧種 F	ホオジロガモ	L	健在種 J
オオソリハシシギ	R	危惧種 F	ミコアイサ	L	健在種 J
オオジシギ	R	危惧種 F	カワアイサ	R	健在種 J
ウミウ	R	減少種 G	ヤマドリ	R	健在種 J
ヒメウ	L	減少種 G	クイナ	L	健在種 J
シロチドリ	R	減少種 G	イカルチドリ	R	健在種 J
ケリ	L	減少種 G	カモメ	L	健在種 J
タゲリ	R	減少種 G	ヒメアマツバメ	R	健在種 J
キョウジョシギ	R	減少種 G	ヤマセミ	R	健在種 J
トウネン	R	減少種 G	アカゲラ	R	健在種 J
ミユビシギ	L	減少種 G	ヒレンジャク	R	健在種 J
アオアシシギ	R	減少種 G	カワガラス	R	健在種 J
クサシギ	R	減少種 G	ミソサザイ	R	健在種 J
タカブシギ	R	減少種 G	カヤクグリ	R	健在種 J
ソリハシシギ	R	減少種 G	イソヒヨドリ	R	健在種 J
チュウシャクシギ	R	減少種 G	コヨシキリ	L	健在種 J
ヤマシギ	R	減少種 G	クイタダキ	R	健在種 J
オオジュリン	R	減少種 G	コガラ	R	健在種 J
ウズラ	L	減少種 H	ヒガラ	R	健在種 J
バン	R	減少種 H	ゴジュウカラ	R	健在種 J
メダイチドリ	R	減少種 H	ホオアカ	R	健在種 J
ムナグロ	R	減少種 H	ミヤマホオジロ	R	健在種 J
ハマシギ	R	減少種 H	アトリ	R	健在種 J
キアシシギ	R	減少種 H	マヒワ	R	健在種 J
タシギ	R	減少種 H	ベニマシコ	R	健在種 J
フクロウ	R	減少種 H	ウソ	R	健在種 J
ヒバリ	R	減少種 H	イカル	R	健在種 J
セッカ	R	減少種 H	カイツブリ	R	健在種 K
ミミカイツブリ	L	健在種 I	ゴイサギ	W	健在種 K
アカエリカイツブリ	R	健在種 I	アオサギ	R	健在種 K
カンムリカイツブリ	R	健在種 I	ノスリ	R	健在種 K
クマタカ	L	健在種 I	チョウゲンボウ	R	健在種 K
トモエガモ	L	健在種 I	オカヨシガモ	R	健在種 K
アメリカヒドリ	L	健在種 I	ヒドリガモ	R	健在種 K
シマアジ	L	健在種 I	オナガガモ	R	健在種 K
オオバン	L	健在種 I	ハシビロガモ	R	健在種 K
メリケンキアシシギ	L	健在種 I	ホシハジロ	R	健在種 K

表6. 哺乳類レッドデータ度

和名	ステータス	レッドデータ度
オオカミ	E	絶滅種 B
アシカ	E	絶滅種 B
カワウソ	F	絶滅種 B
モモンガ	L	危惧種 D
ヤマネ	L	危惧種 D
ツキノワグマ	L	危惧種 D
スナメリ	R	危惧種 E
カワネズミ	R	減少種 G
キクガシラコウモリ	R	減少種 G
コキクガシラコウモリ	R	減少種 G
モモジロコウモリ	R	減少種 G
ヤマコウモリ	R	減少種 G
ヒナコウモリ	R	減少種 G
ユビナガコウモリ	R	減少種 G
ニホンリス	R	減少種 G
ムササビ	R	減少種 G
キツネ	R	減少種 G
テン	R	減少種 G
アナグマ	R	減少種 G
ニホンジカ	R	減少種 G
カモシカ	R	減少種 G
カヤネズミ	R	減少種 H
ヒメヒミズ	L	希少種 I *
モリアブラコウモリ	L	希少種 I *
ウサギコウモリ	L	希少種 I *
テングコウモリ	L	希少種 I *
コテングコウモリ	L	希少種 I *
オヒキコウモリ	L	希少種 I *
ニホンザル	R	健全種 I
スミスネズミ	W	健全種 I
ハタネズミ	R	健全種 I
ヒメネズミ	W	健全種 I
ジネズミ	W	健全種 J
アブラコウモリ	W	健全種 J
ノウサギ	W	健全種 J
スミスネズミ	W	健全種 J
イタチ	R	健全種 J
イノシシ	R	健全種 J
ヒミズ	W	健全種 K
アズマモグラ	W	健全種 K
タヌキ	W	健全種 K
アカネズミ	W	健全種 K

表5. (続き)

和名	非繁殖期ステータス	非繁殖期レッドデータ度
キンクロハジロ	R	健全種 K
キジ	R	健全種 K
イソシギ	R	健全種 K
セグロカモメ	R	健全種 K
オオセグロカモメ	R	健全種 K
ウミネコ	R	健全種 K
カワセミ	R	健全種 K
アオゲラ	R	健全種 K
キセキレイ	R	健全種 K
セグロセキレイ	R	健全種 K
ビンズイ	R	健全種 K
ルリビタキ	R	健全種 K
ノビタキ	R	健全種 K
トラツグミ	R	健全種 K
アカハラ	R	健全種 K
シロハラ	R	健全種 K
エナガ	W	健全種 K
ヤマガラ	R	健全種 K
クロジ	R	健全種 K
シメ	R	健全種 K
カケス	R	健全種 K
コサギ	W	健全種 L
トビ	W	健全種 L
マガモ	W	健全種 L
カルガモ	W	健全種 L
コガモ	W	健全種 L
ユリカモメ	R	健全種 L
キジバト	W	健全種 L
コゲラ	W	健全種 L
ハクセキレイ	W	健全種 L
タヒバリ	R	健全種 L
ヒヨドリ	W	健全種 L
モズ	W	健全種 L
ジョウビタキ	W	健全種 L
ツグミ	W	健全種 L
ウグイス	W	健全種 L
シジュウカラ	W	健全種 L
メジロ	W	健全種 L
ホオジロ	W	健全種 L
カシラダカ	W	健全種 L
アオジ	W	健全種 L
カワラヒワ	W	健全種 L
スズメ	W	健全種 L
ムクドリ	W	健全種 L
オナガ	R	健全種 L
ハシボソガラス	W	健全種 L
ハシブトガラス	W	健全種 L